

—和文—

- 1) 田中伊知郎 (1997) ウィリアム・C・マックグルー著、西田利貞監訳「文化の起源をさぐる—チンパンジーの物質文化—」日経サイエンス 304:142-143.

#### 学会発表

—英文—

- 1) Basabose, K. & Yamagiwa, J. (1996) Ranging and diet of mountain chimpanzees. XVIth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstracts no.046.
- 2) Huffman, M. A., Page, J. E., Ohigashi, H., & Gotoh, S. (1996) Leaf-swallowing by chimpanzees for the control of strongyle nematode infections: Behavioral, chemical and parasitological evidence. XVIth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug.1996, Madison, USA) Abstracts no.566.
- 3) Huffman, M. A. (1996) Recent Trends in Chimpanzee Medicinal Plant Use Research: Primate Behavioral Strategies for the Control of Parasite Infection and Health Maintenance, NSF Research Training Workshop "Parasites and Behavior" (22-28, March, 1996, Univ. California-Davis).
- 4) Huffman, M. A. (1997) An internship with wild chimpanzees. Ancient wisdom, a modern paradigm for tropical medicine? Univ. Alberta, Frucht Memorial Lecture, keynote speaker (5, February, 1997: Department of Anthropology, Edmonton).
- 5) Matsumura, S., Okamoto, K. (1996) Spatial proximity among group members of wild moor macaques. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama). Abstracts p.46.
- 6) Okamoto, K., Matsumura, S. (1996) When do male moor macaques emit loud calls? Intl. Symp. Evol. Asian primates (Aug.1996, Inuyama). Abstracts p 45.
- 7) Yamagiwa, J., Basabose, K. & Kaleme, K. (1996) Ranging and frugivory of eastern lowland gorillas in the Kahuzi-Biega National Park, Zaire. XVIth Congr. Intl.

Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstracts no.045.

—和文—

- 1) 田中伊知郎 (1996) ニホンザルのシラミ卵処理において、技術置換の負担は行動の社会的伝達を阻害したのか? 第50回日本人類学民族学連合大会 (1996年10月、佐賀)
- 2) 田中伊知郎 (1996) ニホンザルにおけるシラミ卵処理技術の変化 (なぜ集中して起こったのか)。第12回日本霊長類学会 (1996年6月、大阪) 霊長類研究 12:286.
- 3) 松室三重・室山泰之・田代靖子・山海直・吉田高志 (1996) ニホンザルの糞便中性ステロイドホルモンの測定。第12回日本霊長類学会 (1996年6月、大阪) 霊長類研究 12:260.
- 4) 室山泰之 (1996) ニホンザルの毛づくろいにおける意志決定。第12回日本霊長類学会 (1996年6月、大阪) 霊長類研究 12:285.
- 5) 山極寿一 (1996) 食とホミニゼーション。第4回日本行動科学学会大会 (1996年9月、東京) : シンポジウム「食: 人間理解の新たな視点」.

#### 社会構造分野

加納隆至・大澤秀行・鈴木 晃

#### 研究概要

A) 中央アフリカ、ザイール森林における野生ボノボの社会及び行動の研究

加納隆至・田代靖子<sup>1)</sup>

ザイール共和国ジョル地区ルオ学術保護区のワンバ森林において、E1集団の社会変動とE2集団の遊動と生息地における食物変動の研究を行った。また、同保護区のイロンゴ森林において、ボノボの密度センサスを行った。

B) 東アフリカ、タンザニアにおける野生チンパンジーの研究

(1) マラガラシ北岸における野生チンパンジーの研究

加納隆至

タンガニカ湖東岸に注ぐマラガラシ川の北岸  
リランシンバ丘陵のチンパンジーの孤立個体群の  
西限を明らかにする調査を行った。

(2) ウガラ丘陵の乾燥疎開林における野生チン  
パンジーの生態研究

小川秀司<sup>2)</sup>

ウガラ丘陵におけるチンパンジーのネストセン  
サスと糞分析、チンパンジーの生息地内外の植生  
調査を行い、同地域におけるチンパンジーの生息  
地利用に関する研究を行った。

(3) ルワジ川周辺のチンパンジーの分布調査

小川秀司<sup>2)</sup>

これまでチンパンジーの分布域外とされていた  
ルクワ地方ルワジ川周辺で広域調査を行い、ネスト  
等から同地域の野生チンパンジーの生息を確認  
した。

C) 性淘汰、社会構造に対する要因としての霊長  
類のメスの繁殖戦略

大澤秀行・光永総子<sup>3)</sup>・柳原芳美<sup>4)</sup>

霊長類における性淘汰、および社会構造に影響  
をおよぼすメスの性行動を研究している。これま  
で放飼群やグループケージ飼育のニホンザルにつ  
いてその行動を調べてきた。メスの生殖生理学的  
解析も重要であるため、生理学者の協力も得て研  
究を行っている。

D) 中央アフリカ乾燥サバンナおよび多雨林にお  
ける霊長類の社会生態学的野外研究

大澤秀行

カメルーン北部のカラマルエ国立公園における  
パタスザルとミドリザルの野外研究を1984年よ  
り継続している。今年度は、現地調査はこれまで  
調査を継続してきたグループについてセンサスを  
行い、次年度調査の基礎資料とした。熱帯林の調  
査は、ガボンのプチロアング自然保護区について、  
霊長類の特にこれまでの情報に乏しいシロエリマ  
ンガベイを中心とするオナガザル類の生息調査を  
行った。シロエリマンガベイに関しては食痕情報  
より採食リストを作成した。

E) タイ国南部の霊長類とその森林環境の保護に  
関する基礎研究

大澤秀行

1996年10月、日タイ合同研究プロジェクトに  
より、タイのカオ・ヤイ国立公園において、プタ  
オザルの生息調査、採食行動調査を行った。

F) インドネシア、クタイ国立公園のオランウ  
ータンの野生における社会、生態学的研究

鈴木晃

1983年から続けている野生オランウータンの  
生態学的研究を続行している。

(1) 個体職別の下に約50平方キロメートルの観  
察地に過去13年間に約50頭余りのオランウータ  
ンの個体を観察してきた。(2) 性発情周期、出産  
仔数等の情報が充実してきた。(3) 石炭開発の  
中で石炭会社との間で、保護に関する打ち合わせ  
が進行している。本研究は、本研究所とインドネ  
シア、パジャジャラン大学との間で大学間協力研  
究として進行されてきているものである。

G) マカク類の比較社会学的・生態学的研究

加納隆至・大澤秀行・小川秀司<sup>2)</sup>・田代靖子<sup>1)</sup>

新宅広二<sup>5)</sup>・船越美穂<sup>1)</sup>

マカク類の生態・社会進化を明らかにするため  
野外研究を行っている。今年度はニホンザルにつ  
いて、金華山(採食生態)、高崎山(個体群動態)、  
嵐山(老齢メスの社会性)、松本盆地(野生群の保  
全生態学)において調査を行い、チベットモンキ  
ーについては行動分析のまとめを行った。

H) その他の哺乳類の社会行動研究

加納隆至・大澤秀行・小林隆<sup>6)</sup>・柳原芳美<sup>4)</sup>

半野生馬(宮崎県都井岬)、アライグマ(犬山市栗  
栖)について社会行動の調査を行い、霊長類とは  
異なるタイプの社会についても動物社会学的研究  
を行っている。

論文

—英文—

1) Kano, T. (1996) Male rank order and  
copulation rate in a unit-group of bonbos at  
Wamba, Zaïre. In W. McGrew & T. Nishida

1) 大学院生 2) COE研究員 3) 文部省研  
究支援推進員 4) 技能補佐員 5) 研究生 6)  
非常勤講師

(Eds.), The Great Ape Societies, Cambridge University Press, Cambridge, pp.135-145.

—和文—

- 1) 小川秀司 (1996) ニホンザル嵐山F群における養子取りによる双子と母親の社会交渉. 霊長類研究 12(1):1-10.

総説

—英文—

- 1) Suzuki, A. (1997) Life in the woods. Oxford Authors 11:1-8. Oxford University Press, Oxford.

書籍

—和文—

- 1) 加納隆至 (1996) 森を語る男 東京大学出版 (東京)

報告・その他

—英文—

- 1) Kano, T., Lingome, B., Idani, G. & Hashimoto, C. (1996) The challenge of Wamba. In Paola Cavalieri (Ed.), The Great Ape Project, Ecta & Animal 96/8, pp.68-74. Milano.
- 2) Suzuki, A. (1997) Kelai<sup>2</sup> hydroelectric power project, Progress Report, No.1. JICA.

学会発表等

—英文—

- 1) Idani, G., Hashimoto, C. & Tashiro, Y. (1996) Seasonality of food items and ranging patterns of bonobos at Wamba, Zaire. XVIth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstracts no.433.
- 2) Ohsawa, H. (1996) Social dynamics of patas monkeys with special reference to male changes. XVIth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstracts no.591.
- 3) Ohsawa, H. (1996) Population dynamics of Japanese monkeys at Takasakiyama:

Trends after 1985. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama) Abstracts p.49.

- 4) Tashiro, Y. & Hirata, S. (1996) Social role of alpha-female to decide male rank in Japanese monkey group. XVIth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstracts no.513.

—和文—

- 1) 船越美穂・常田英二 (1996) 志賀A群の繁殖特性. 第2回野生動物保護学会 (1996年10月, 北海道) 講演要旨集 p.34.
- 2) 伊谷原一・小川秀司 (1996) 乾燥疎開林におけるチンパンジーの生息地利用 I:泊まり場. 第12回日本霊長類学会 (1996年6月, 大阪). 霊長類研究 12(3):282.
- 3) 小川秀司・伊谷原一 (1996) 乾燥疎開林におけるチンパンジーの生息地利用 II:乾季の食性. 第12回日本霊長類学会 (1996年6月, 大阪). 霊長類研究 12(3):282.

## 行動神経研究部門

### 思考言語分野

松沢哲郎・友永雅己

#### 研究概要

A) チンパンジーの認知・言語機能の比較認知的研究

松沢哲郎・友永雅己・佐藤明<sup>1)</sup>・水谷俊明<sup>2)</sup>  
平田聡<sup>3)</sup>・南雲純治<sup>4)</sup>

チンパンジーとヒトを対象に、認知・言語機能の比較研究を継続しておこなった。主として1個体のテスト場面で、色や数の認識とその記憶の減衰、図形パターンや表情の認知、一体性の知覚、刺激等価性、難易度の異なる課題間の選択行動、トークンの使用、コンピュータ補助のなぐりがき、匂いと味を手がかりとした弁別学習、同時レバー押し課題などについて実験的分析をおこなった。この研究テーマの一部は、藤田和生 (京大文学部)、金沢創 (京大文学部・学振特別研究員)、鈴木修司 (北大文学部院生)、上野吉一 (北大実験生物センター)、イバー・イバーセン (ノースフロリダ大学)、ドラ・ピロ (オックスフォード大学) との共同研究である。